

「地方創生と伝統行事」番外編

—『枕草子』の田植えと歌—（後編）

上席専門職 平沼 浩

目次

1. はじめに
2. 作品の特徴、執筆目的、読み解きのカギ
3. 「香炉峰の雪」を例に
(以上、前編)

4. 『枕草子』の田植えと歌
5. 歌う人々
6. まとめ

前編の概略

本稿では、清少納言が約千年前の田植えの様子をどのように描いたか、そして、なぜ田植え等の農作業を題材に取り上げたのかについて考察する。主なキーワードは「古今集」、「横串を入れる」、「ホトトギス」である。

前号（No.171）前編では、『枕草子』を読み解くにあたり、次の三点について整理した。

(1) 作品の構造的特徴

- ① 各章段は、それぞれ小さなテーマを持っており、どこからでも気楽に楽しめる。
- ② 読者を困惑させる最大の要因は、「類聚的章段」、「日記的章段」、「随想的章段」の三種類が時系列を無視して、ランダムに配置される雑纂形態にある。

(2) 作品の執筆目的

- ① 清少納言が仕えた中宮定子（一条天皇の後）に捧げた作品
- ② 『古今和歌集』の向こうを張る意気込みをもった作品

(3) 読み解きのカギとしての季語

有名な「香炉峰の雪」のエピソードを例に、季語である「雪」で関連章段に横串を入れてまとめることで、個別の章段から受ける一面的印象も大きく変わることを確認した。

4. 『枕草子』の田植えと歌

『枕草子』の田植えと歌は、第二百十段「賀茂へ詣る道に」に描かれている。しかし、いきなり該当箇所にはフォーカスするのは拙速である。というのも前編で扱った「香炉峰の雪」の例から分かるように個別章段からは一面的な印象しか得られないからである。清少納言は、話題の伏線や布石となる関連情報を雑纂形態の章段群中に巧みに散らしている。

そこで、「香炉峰の雪」の例に倣い「賀茂へ詣る道に」に登場する季語「ホトトギス」を手掛かりに関連章段に横串を入れ、『枕草子』の田植えと歌を読み解いていくことにする。

また、本稿では平安文学研究者の山本淳子が著書『枕草子のたくらみ』で導いた執筆目的を読み解きの道標とする。想定された読者（中宮定子）と作品の方向性（『古今和歌集』に向こうを張る）は、解釈にあたり極めて有用な指針となるからである。

(1) 『古今和歌集』のホトトギス

まず、『古今和歌集』とそこで詠まれた「ホトトギス」の特徴を確認しておきたい。『枕草子』が『古今和歌集』の向こうを張る意気込みをもった作品ならば、『古今和歌集』を踏まえた革新があるはずである。

① 『古今和歌集』の特徴

平安文学者の小沢正夫と松田成穂は、『古今和歌集』（新編日本古典文学全集）の序文で次のように述べている。

「『古今集』は醍醐天皇の命令により、紀貫之以下四人の撰者たちが、約一千首の和歌を二十巻にまとめて奏覧に供したものである。それが歌の内容で、さまざまに分類し配列されているが、一番多いのが巻第一から巻第六までの四季の歌と、巻第十一から巻第十五までの恋の歌とである。」（原文ママ）

このように大きな比重を占める四季と恋の歌について、松田は同書の解説で、次のように述べている。

「四季と恋とが『古今集』の部立の二つの大きな柱で、その他の小さな部立がその周囲に配されたという形をとっているのである。そして、四季・恋の二つの部立は九世紀後半の平安の都で外国の影響を受けることなしに、日本の詩歌の素材に即して自然に発達したものである。」（参考1）

そして、この四季と恋の部立の関係について、小沢と松田は、同書の序文で次のように述べている。

「勅撰集の部立にあって、四季と恋に大きく分けられているが、それは和歌という短詩型叙情詩のアンソロジー編集上の技術にすぎなかったとも評せるだろう。（中略）『古今集』所収歌の中にも、自然と心との双方にか

かわるものも少なくないが、撰者とすればどちらか一方のテーマを詠んだとして、アンソロジーを構成するほかなかった。」

この点について、松田は同書の解説で、ホトトギスを例にあげて、次のように述べている。

「ほととぎすは初夏の景物であるとともに、悲恋の比喩としてしばしばうたわれる鳥であるが、ほととぎすに寄せた恋の歌と思われるもので、夏の部に収められたものが少なくないのである。」

以上のことから、『古今和歌集』の特徴は、概ね次の三点に要約できそうである。

- ・四季の歌と恋の歌が大きな柱である。
- ・四季と恋の二つの部立は九世紀後半の平安の都で外国の影響を受けることなしに、自然に発達した。
- ・四季と恋の二つの部立は、実は便宜的分類で、四季の歌の中にも恋の歌が多い。

これをより大雑把に言えば、『古今和歌集』の大部分は、人が人を思う恋の歌で構成されているということになる。

一方、巻第七の賀歌には、国歌「君が代」のルーツとなる長寿を祈る歌があり、巻第二十の一部を構成する東歌には、庄内平野を経て日本海に注ぐ最上川を上り下りする稲舟が詠まれているなど、題材の裾野は案外広い。なお、「君」という言葉は、帝（天皇）に限らず同僚や友人、恋人にも用いられていた。

ところで、春夏秋冬といっても、太陽暦を採用する現代と違って明治維新以前は、旧暦の春夏秋冬だった。その違いも踏まえておきたい。（参考2）は、国立天文台の資料引用だが、伝統的季節（旧暦）の到来は、現代の季節感に比べて、およそ一～二か月早い。四月は初夏にあたり、七月は

（参考1）古今和歌集の構成

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
分類名	春歌上	春歌下	夏歌	秋歌上	秋歌下	冬歌	賀歌	離別歌	羈旅歌	物名
歌数	68	66	34	80	65	29	22	41	16	47

巻	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
分類名	恋歌一	恋歌二	恋歌三	恋歌四	恋歌五	哀傷歌	雑歌上	雑歌下	雑雑歌	大歌所御歌他
歌数	83	64	61	70	82	34	70	68	68	32

（出典）「古今和歌集」（新編日本古典文学全集）解説より

初秋にあたる。八月の十五夜の満月は、中秋の名月と呼ばれた。

表中、天文学的季節と伝統的季節（旧暦）が符合しているところが興味深い。

（参考2）現代の季節と伝統的季節（旧暦）

	春	夏	秋	冬
気象学的季節	3月～5月	6月～8月	9月～11月	12月～2月
天文学的季節	春分～夏至	夏至～秋分	秋分～冬至	冬至～春分
伝統的季節	暦月区切り	正月～三月	四月～六月	七月～九月
	節月区切り	立春～立夏	立夏～立秋	立秋～立冬
		十月～十二月	冬至～立春	

（出典）国立天文台・暦 Wiki「暦とは？」より

② 『古今和歌集』のホトトギスの特徴

『古今和歌集』にホトトギスが登場する歌は、計四十二首。内訳は、夏歌に二十八首（うち九首の内容は恋）、恋歌に七首、物名と哀傷歌に二首ずつ、賀歌、離別歌、雑詠歌にそれぞれ一首ずつある。

なお、その表記方法は「郭公」が三十二例、「時鳥」が八例、平仮名が二例である。以下、『古今和歌集』のホトトギスの特徴を列挙してみたい。

（夏歌の八割超に登場）

春夏秋冬、四季の歌のうち夏歌は三十四首と、春歌や秋歌に比べれば数は少ないが、夏歌のうちホトトギスが登場するものは、二十八首とその八割を超える。これは、春歌の計百三十四首のうち鶯の登場するものが十九首と二割に満たないことと比べると、夏のホトトギスの存在感を物語っている。

（その読み人は、ほぼインドア派）

旅の途中でホトトギスの鳴き声を聞くなど明らかにアウトドアの状況を詠んだものは僅かに三首。それ以外は自宅その他の屋内にいる状況を詠んだものである。このうち、ホトトギスを待つものは八首、うち初音を待つものは四首。次の歌は、初音を待つ夏歌冒頭の

一首。

巻第三 夏歌

わが屋戸の池の藤波咲きにけり 山郭公いつか来なむ

（現代語訳）わが家の庭先の池のほとりの藤の花がみごとに咲いたよ。山ほととぎすは、いつここに来て鳴いてくれるのだろうか。

『古今和歌集』新編日本古典文学全集より

（恋に関するものは、約四割弱）

ホトトギスに寄せて恋しいという気持ちを詠むものは、夏歌に九首、恋歌に七首の計十六首。これはホトトギスが登場する歌の約四割弱にあたる。次の歌は、恋歌冒頭の一首。

巻第十一 恋歌一

郭公鳴くや五月のあやめぐさ あやめも知らぬ恋もするかな

（現代語訳）ほととぎすの鳴く五月となり、家々には菖蒲が飾られているが、私は恋のために理性がなくなって、物の区別もつかなくなり、ただ恋にまようばかりであるよ。

『古今和歌集』新編日本古典文学全集より

（悲しさ切なさを象徴させるもの、約三割強）

ホトトギスの鳴き声に悲しさや切なさを象徴させるものは十四首。これは、ホトトギスが登場する歌の約三割強にあたる。内訳は、夏歌に九首（うち五首の内容は恋）、そして恋歌と哀傷歌とに二首ずつ、離別歌に一首。

（夜ないし夜明けのホトトギスが約三割弱）

夜ないし夜明けのホトトギスを詠んだものが十二首。これは、ホトトギスが登場する歌の約三割弱にあたる。

（ホトトギスと好相性の植物）

植物とともにホトトギスが詠まれた歌は五首。季節を反映して、晩春の藤の花が一首、橘の花が二首、卯の花が一首、菖蒲が一首。

（ホトトギスと田植え）

ホトトギスの登場する四十二首中、他の歌

とは全く趣を異にする歌が一首だけある。田植えに関連する歌である。

巻第十九 雑俳歌

いくばくの田を作ればか郭公 しでの田長を
朝な朝な呼ぶ

（現代語訳）いったいほととぎすはどれくらいの田を作っているからといって、「しでのたおさ」（死出の田長）と、毎朝お頭を呼ぶのか。

『古今和歌集』新編日本古典文学全集より

この歌の現代語訳は、少々回りくどい。「死出の田長」とは何者なのか。『古今和歌集』（新編日本古典文学全集）の注をみると、「死出の田長」は「冥途の農夫の頭」の意で、ほととぎすの異名」と説明している。

おそらく、「死出（冥途）の田長」という仮想世界の土台には、確固たる現実世界があるはずである。だとすれば、ホトトギスは、現世でも冥途でも「田を作るお頭」を呼ぶ鳥、すなわち両世界で田植えを促す勸農鳥と解釈すれば、歌の意味はすっきりする。

この歌は、あたり一円の田植えがすっかり終わったというのに相変わらず鳴き続けるホトトギスと、田植えの賑わいの去った周辺空間を詠んだものだろう。この一首から平安人が意識したホトトギスの勸農鳥としての側面を知ることができる。

（参考3）ホトトギス



（出典）ズカンドットコム「日本の野鳥識別図鑑」より（著作権フリー素材）

（参考4）野鳥としてのホトトギス

カッコウ目、カッコウ科、ホトトギス。

キョッキョッキョッキョッキョッキョという鋭い声（雄）。全長：28cm。屋久島以北の山地の林に飛来。北海道では南部のみで少ない。ヒヨドリほどの大きさ。腹のしま模様はカッコウより太く、少ない。主にウグイスに托卵する。飛びながらよく鳴き、夜も鳴く。雄の声は「テッペンカケタカ」「特許許可局」などと聞きなされる。

（出典）「BIRD FAN」公益財団法人日本野鳥の会より

（2）ホトトギスの章段（伏線その一）

さて、本題の『枕草子』である。本稿では、ホトトギスで横串を入れてまとめた関連章段を「ホトトギスの章段」と呼ぶこととする。該当する六章段を章段番号に従い「伏線その一」、「伏線その二」、そして、「田植えと歌」に分けてみていくこととする。

前編に続き、本稿で引用する『枕草子』の章段番号、本文、現代語訳は断りのない限り、松尾聰・永井和子『枕草子』（新編日本古典文学全集）による。

① 第三十五段「木の花は」

第三十五段「木の花は」にあげられるのは、まず、春の紅梅、桜、藤。続く夏の橘とともに何気なくホトトギスが登場する。そして、楊貴妃の泣き顔に譬えられた梨の花、鳳凰が栖むという桐の花、最後には、必ず五月五日の節供に咲くという棟（梅檀）の花である。

② 第三十七段「節は」

第三十七段「節は」では、五節（一月一日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日）のうちで、五月の節供が最もすばらしいという。邪気を払う菖蒲を屋根に葺いたり、身に着けたり、紫の紙に棟の紫色の花、青い紙に菖蒲の葉を組み合わせるのも趣があり、夕暮れに鳴き渡るホトトギスもすばらしいという。

③ 第三十九段「鳥は」

第三十九段「鳥は」の導入部は、鸚鵡おうわを始め十五種の鳥があげられるが、感想は短い。

ところが、その後の鶯うぐいすとホトトギスに関して文章量が爆発的に増加する。清少納言は、鶯の残念な点をあげつつホトトギスは言い表す方法がないほどすばらしいと絶賛する。次の抜粋は、その絶賛部分の現代語訳である。

なお、下線部は、本題である第二百十段「賀茂へ詣る道に」への地理的な伏線として筆者が注目した箇所である。賀茂祭りは今でいう葵祭りである。

第三十九段「鳥は」(抜粋)

本文略

(現代語訳) 賀茂祭りの帰りの行列を見ろとい
うので、雲林院や知足院などの前に牛車ぎしやを立て
ていると、郭公はつこうも折からの情趣にがまんできな
いであろうか、鳴くと、鶯うぐいすがたいへんよくま
ねをして、その声に似せて、小高い木立こだちの中に、
同じ声で声を合わせて鳴いているのは、さすが
に趣がある。

郭公は、なんといっても全く言い表すべき方
法がないほどすばらしい。いつの間にか、得意
そうに鳴いているのが聞こえているのに、卯の
花や、花橘はなたちばななどに宿って、姿の方は奥ゆかし
くそのかげにちょっと隠れているのも、くやし
いほどすばらしい気立てである。

五月雨さみだれのころの短い夜に目をさまして、どう
にかして他の人よりも前に聞こうと待っている
と、夜がまだ深いところに鳴き出したその声は、
気がきいて、愛嬌のある感じがして、心がさま
よい出るほどすばらしく、どうしようもない。
六月になってしまうと、全く音もしなくなっ
てしまうのは、一通りには表現できないほどよい
のである。

夜鳴くものは、何もかも結構である。ただ、
赤ん坊だけは、そうではない。

下線部筆者、以下同様。

ホトトギスは、清少納言にとってこの上な
い最高の鳥であることは間違いない。

『古今和歌集』のホトトギスと対比すると、
植物に関しては、橘の花、菖蒲、卯の花が共

通し、夜鳴くことの趣も肯定している。しか
し、清少納言は、『古今和歌集』の詠み人のよ
うな悲恋に涙する湿った感情を加えない。

(3) ホトトギスの章段(伏線その二)

ここでの清少納言は、行動的なアウトドア
派である。『古今和歌集』の読み人たちが、総
じて屋内でホトトギスの声に感傷的に涙する
インドア派であったことを思えば、その強気
な明るさは際立って対照的である。

① 第九十五段「五月の御精進のほど」

第九十五段「五月の御精進みしやうじんのほど」は、文
字通り五月の話である。「精進のほど」とは仏
教の戒を守る期間であり主体は中宮定子。そ
うした頃の出来事である。

『枕草子』の中でも屈指の長編章段のため、
あらすじを掻い摘んで紹介する。なお、下線
部は、第二百十段「賀茂へ詣る道に」への
伏線として筆者が注目した部分である。

(ホトトギスの声を訪ねて)

「ホトトギスの声を探しに出かけたい」と
言う清少納言に同僚の女房たちは我も我もと
賛同。牛車を一台手配して四人で乗り込むと、
他の女房たちが羨ましがり、「もう一台」と言
うのを中宮定子は制止する。そのやりとりを
耳にもとめず、清少納言たちは出かける。

途中の馬場では弓の演習中だということで、
見物を勧められるが、「見たくもない。早く通
過しなさい」とどんどん進む。

清少納言は、この道は賀茂祭りの頃が自然
に思い出されておもしろいという。

(中宮定子の伯父の別邸で脱穀を見る)

到着したのは、高階明順たかしなあきのぶ(中宮定子の伯父)
の別邸だった。田舎風の簡素な造りの建物や
室内の仔たすまいに清少納言は好感を示す。ま
た、ホトトギスが喧やかましいほど鳴いているとい
うのに中宮様にお聞かせできず、来たがって

いた同僚にも申し訳ないと思う。

明順は、「こういう所に来たら、こうした事を見るべき」と稲というものをとりだして、近所の若くて見た目のこざっぱりした女たちを五、六人集めて、稲こきを見せた。また、見たことのないくるくる回る機具を二人に引かせて歌を歌わせるのを見た。清少納言は、ホトトギスの歌を詠もうとしていたことも忘れてしまう。

高階明順は、田舎料理を振る舞い「この下蔵^{しな}は私が自分で摘んだものです」と勧めた。

（牛車を卯の花の垣根にして）

女房の一人が、「ホトトギスの歌は、ここで詠みましょう」と言うが、清少納言は、「それもそうだけど、道中でもいいでしょう」と言い、皆で牛車に乗り込む。

卯の花を折って、車の簾^{すだれ}や屋根などに挿したので、車は卯の花の垣根のようになっていた。この車で誰かに会えることを期待したが、期待空しく御所の近くまで来てしまった。

「このままではやめられない。せめてこの車の様子を語り草にさせてから」と一条殿（故太政大臣藤原為光の屋敷）に車を止め、侍従を務める藤原公信^{きみのぶ}（為光の息子、若輩ながら正五位と貴族の端くれ）を呼び出す。

「今すぐ伺います。しばらくお待ちください」との返事は、着替え中とのことだった。

（置き去りにされる藤原公信）

清少納言たちは、「待つほどのことでもない」と牛車を走らせ、土御門の方へ向かう。

すると、侍従殿（公信）は、道の途中で帯を結びながら、「しばし、しばし」と言って追いかけて来る。供の侍が三、四人。履物も履かずに走ってきた。

清少納言たちは、「早く走らせなさい」と牛車を急がせて土御門に行き着いた時、あえぎながら追いついた侍従殿（公信）は、車の様子を見て「現実の人間が乗っているとは、全く見えない」とお笑いになるので、供の者た

ちも一緒におもしろがって笑った。

公信はホトトギスの声を聞いたのならと、歌を問うが、清少納言は、「歌は、まず中宮様に卯の花の車を御覧に入れてから。宮中にいらっしゃいませ」という。公信は、「正装でない鳥帽子^{ぼし}姿では行かれない」と度々ふり返りながら、のろのろと卯の花を手を帰っていく。清少納言は、それもおもしろいという。

（中宮定子から、それで歌は？）

中宮定子のもとに参上する。出かけるときに恨んだ人たちも、侍従殿（公信）が一条大路を走ったことに話が及ぶと皆笑った。

中宮定子「それでどうしたのか、歌は」

清少納言「かくかくしかじか」

中宮定子「残念なこと。そのホトトギスを聞いたという所で、さっと詠めばよかったのに。感心できない。ここででも詠みなさい。本当にしようのないこと」

清少納言は、なるほどそうだと思った。

（藤原公信から歌が届くが）

歌を詠む相談をしていると、侍従殿（公信）から、卯の花をつけた歌が届く。中宮定子は、「これを使って早く返事をせよ」と御硯箱^{おんすずり}の蓋に紙など入れてお下しあそばされた。

清少納言と宰相^{さいしやう}の君（古参の女房）が、歌を押し付け合っていると、雷が恐ろしく鳴ったので、御格子^{みこうし}を大慌てで降ろしてまわっているうちに、歌の返事を忘れてしまった。その後も雷見舞いの来客の相手をしているうちに、歌のことはとりまぎれてしまった。

清少納言は、「今日は歌に縁のない日だった。出かけたことも黙っていよう」と笑って見せた。すると中宮定子は、「出かけた人たちで何とかすれば詠めただろう。詠むまいとしているのではないか」と不興気に仰せになった。

（二日後の押し問答）

宰相の君が下蔵^{しな}の味を話題に出したので、中宮定子は下の句をお書きになり、「上の句をいいなさい」と仰せになる。

したわらび
下 蔵 こそ恋しけれ

これに清少納言は、上の句を差し上げる。

ほととぎす
郭公 たづねて聞きし声よりも

中宮定子「ひどくおおっぴらに言つてのけたこと」とお笑いあそばされる。

清少納言は、「歌は、もう一切詠みますまいと思っています。もし『詠め』と仰せになるなら、おそばに伺候することができそうもございません。歌が上手いとされた者の子孫は、上手くもないのに得意然と詠んだりしては先祖が気の毒でございます」

中宮定子「それならば、そなたの心にまかせる。詠めとは言ふまい」

清少納言「気持ちが楽になりました。もう歌のことは気かけないことにいたします」

その日は庚申待ちといって夜明かしをする日だった。中宮定子の兄藤原伊周が夜更けに女房たちに歌を詠ませていた。伊周は、「なぜ詠まない、題をとれ」と清少納言を責めるのだが、清少納言は、「詠む必要はないとお言葉を承り、歌は詠まないこととなっておりますので、考えてもおりません」と答える。

すると中宮定子は、歌を書いて投げ渡す。

もとすけのち
元輔が後といはるる君しもや 今宵の歌にはづれてはをる

*「元輔」は、清少納言の父清原元輔を指す。

この歌に清少納言は笑い、伊周は歌を覗きこむ。詠まないはずの清少納言が返した歌は。

その人の後といはれぬ身なりせば 今宵の歌をまづぞよままし

「詠め」と言わずに詠ませたのは、中宮定子の貫録勝ちである。しかし、ホトトギスの歌は、すったもんだの挙句、宙に浮いている。

さて、下線部の一つ目は、地理的な伏線である。二つ目の高階明順の言葉は、脱穀に限

らず見るべき事を暗示している。

② 第二百六段「見物は」

第二百六段「見物は」の書き出しは、次のとおり。

第二百六段「見物は」

見物は 臨時の祭。行幸。祭りのかへさ。御賀茂詣で

(現代語訳) 見るものとしては、臨時の祭。行幸。賀茂祭りの帰りの行列。御賀茂詣で。

書かれている臨時祭の内容は、賀茂の臨時祭なので、話題は賀茂神社方面が中心である。

五月の行幸ほど優雅なものはないといい、菖蒲を飾り、ホトトギスが鳴くのも比べるものがないほど趣があるという。

賀茂祭りの帰りの行列もたいへんおもしろく、ホトトギスがたくさん鳴き、その声をすばらしいと思っていると、鶯がホトトギスに似せて老いた声で鳴くのもおもしろいという。

賀茂祭りの斎院を乗せた神輿は素晴らしく神々しいといい、供をする蔵人衆の衣装に卯の花の垣根を連想し、ホトトギスがそこに隠れているように見えるという。

*「斎院」は、祭の巫女。古くは内親王が務めた。

(4) ホトトギスの章段(田植えと歌 その一)

いよいよ、本題である。はじめに、『古今和歌集』との違いを指摘しておきたい。『古今和歌集』に一首だけあるホトトギスを勸農鳥として詠んだ「死出(冥途)の田長」の例は、現世の田植えを直接詠んだものではなかった。

これに対して、『枕草子』の田植えは、現世の人々の田植えであり、その執筆目的と思われる『古今和歌集』の向こうを張る意気込みをもった作品」らしさを示している。

編成的な特徴も指摘しておきたい。清少納言は、「田植え」を書いた第二百十段「賀茂へ

詣る道に」の直後の第二百十一段「八月のつごもり、太秦に詣づとて」に、「稲刈り」を書き、本人の回想により季節も場所も異なる両章段を関連づけている。このため、両章段は、一体的なものとして扱うべきだろう。その連結箇所は、第二百十一段の下線部である。

それでは、まず両章段の本文と現代語訳を続けて紹介したい。そのうえで、両章段の構造的な特徴を横断的に読み解いていきたい。

第二百十段「賀茂へ詣る道に」

賀茂へ詣る道に、田植うとて、女の、あたらしき折敷のやうなる物を笠に着て、いとおほう立ちて、歌をうたふ。折れ伏すやうに、また何事するとも見えで、うしろぎまに行く。いかなるにかあらむ、をかしと見ゆるほどに、郭公をいとなめうたふ聞くにぞ心憂き。「郭公、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、われは田植うれ」とうたふを聞くも、いかなる人か、「いたくな鳴きそ」とは言ひけむ。仲忠が童生ひ言ひおとす人と、「郭公、鶯におとる」と言ふ人こそ、いとおほうにくけれ。

(現代語訳) 賀茂へ参詣する途中で、田植えをするということで、女が新しい折敷のような物を笠としてかぶって、とてもたくさん立っていて、歌をうたう。身体を曲げ伏せるように、また何事をするというふうにも見えないで、後ろの方に行く。いったい何のためなのだろうか、おもしろい、と思って見ているうちに、郭公のことをひどくぶしつけにうたうのを聞くのは、全く不愉快だ。「郭公、きさま、きやつよ。きさまが鳴くから、おれは田植えをする」とうたうのを聞くにつけても、いったいどういう人が、「いたくな鳴きそ」とは歌に詠んだものだろう。仲忠の子供時代の生立ちを言ひけなす人と、「郭公は鶯に劣る」と言う人は、ひどく情けなくにらしい。

- * 「折敷」は、薄い板で作った盆のようなもの。
- * 「いたくな鳴きそ」は、万葉集巻第八からの引用。「ほととぎすいたくな鳴きそ ひとり居て眠の寝えぬに聞けば苦しも」(ホトトギスよ、そうひどく鳴くな。ひとり寝覚めて眠れないでいる時に聞くのはつらい)。作者は^{おおもとのさかのうえのいつらめ}大伴坂上郎女。

* 「仲忠が童生ひ言ひおとす人」の「仲忠」は、『うつほ物語』の主人公の藤原仲忠。容姿、官位、教養、琴の腕前もライバルの源^{みなもとのすずし}涼と互角。第七十九段「返る年の二月二十余日」で中宮定子の肩を持つ女房たちは、仲忠の欠点として生立ちを指摘する。仲忠の祖父は、実は高名な遣唐使で琴の名器と技を一人娘に伝授するが一家は零落、その娘の子が仲忠である。極貧に至り幼少期の仲忠は、熊の親子に譲ってもらった巨木の洞穴(うつほ)に棲み、狩猟生活で母を養いながら立派に成長する。

* 「郭公、鶯におとると言ふ人」は未詳。おそらく優劣論争で清少納言をムキにさせた人。



- ・「折敷のような物」と清少納言が表現したのは、こうした笠だったのだろうか。
- ・日除け雨除けになるのはもちろん、笠の動きの揃い具合から早乙女の活力や疲労も見てとれる。

広島県北広島町、『壬生の花田植え』の早乙女たち。筆者撮影。

第二百十一段「八月のつごもり、太秦に詣づとて」

八月のつごもり、太秦に詣づとて見れば、穂に出でたる田を、人いとおほく見えわぐは、稲刈るなりけり。「さ苗取りしか、いつの間に」、まことにさいつごろ、賀茂へ詣づとて見しが、あはれにもなりけるかな。これは男^{おとこ}どもの、いと赤き稲の、本ぞ青きを持たりて刈る。何にかあらむして、本を切るさまぞやすげに、せまほしげに見ゆるや。いかでさすらむ、穂をうち敷きて、並み^{なら}をるもをかし。いほのさまなど。

(現代語訳) 八月末に、太秦に参詣するということで見ると、穂が出ている田を、人がとてもたくさんいて見て騒いでいるのは、稲を刈るのであった。「さ苗取りしか、いつの間に」と歌にあるように、本当に、先だって、賀茂に参詣するということで道で見たそのさ苗が、いつの間にかしみじみとした秋が来て稲となっていたのだった。この場合は男たちが、とても赤い稲で、根もとは青いのを持ったままで刈る。何だろう

かわからない道具を使って根もとを切る様子が
楽々としているので、自分でやってみたいよう
に見えることだ。どうしてそんなことをしてい
るのだろうか、穂を一面に敷いて、自分たちは
並んで腰をおろしているのも、おもしろい。仮
小屋の様子なども…。

＊「さ苗取りしか、いつの間に」は、『古今和歌集』
秋歌上からの引用。「昨日こそ早苗取りしかい
つのまに 稲葉そよぎて秋風の吹く」（苗代の
早苗をとって、田植えをしたのはつい昨日の事
だと思っていたのに、いつの間に秋風が稲葉を
そよそよと鳴らして吹くようになったのだろ
う）。

細部に注目する前に、清少納言の肯定・否
定の感情要素をバロメーターに両章段の構造
を横断的に明らかにしてみたい。肯定の感情
要素を「興味・好感」、否定の感情要素を「不
快感」として表にしたのが、(参考5)である。

第二百十段「賀茂に詣る道に」では、興味
深く田植えの様子を観察し、「後ろに進むの
はなぜだろう、おもしろい」と興味・好感を
示している。それが、ホトトギスの歌を聞いた
途端、不快感の連鎖が始まり、万葉古歌へ
の不快感、仲忠の生立ちへの悪口や鶯と比較
したホトトギスの悪口へと話題が逸れてい
く。不思議なことに清少納言の不快感の矛先
は、ホトトギスを悪く歌った当事者ではなく、
別方向に逸れていくのである。

第二百十一段「八月のつごもり、太秦に詣
づとて」では、『古今和歌集』の歌を引用しな
がら「賀茂に詣る道」で見た苗を回想し、し

みじみと秋の到来で稲となったことを感じる
のだが、ホトトギスの歌に不快感を覚えたこ
となどすっかり忘れている。稲刈りの様子も
田植え同様、興味深く観察し「道具は何だろ
う、自分でやってみたい」と興味・好感を示
している。休憩してくつろぐ様子や仮小屋の
様子にさえも好感を示している。このように
第二百十一段には、否定の感情要素は存在し
ない。

両章段を横断的に眺めて気づかされるの
は、清少納言が田植えの様子にも稲刈りの様
子にも興味・好感を示し、稲刈りを「自分で
やってみたい」とまで書いている点である。
そして、大好きなホトトギスが悪く歌われた
ことに端を発する不快感の矛先は、歌った当
事者ではなく、別の方向に向けられており、
実は田植えをする人々に対して、その不快感
はほとんど無害化されている点である。

両章段の構造を横断的により単純化したの
が、(参考6)である。ホトトギスの歌に端を
発する不快感が無害化されているとすれば、
それは、興味・好感をもって書かれる一連の
田植えと稲刈りの流れに添えられた言わばク
セの強いアクセントのようなものである。

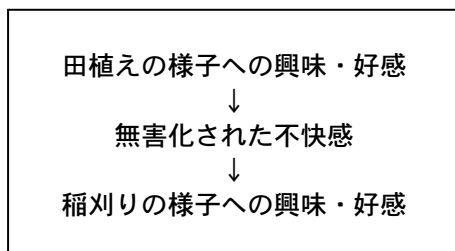
味覚の連続に譬えるなら、「甘味→甘味」と
いう単調な流れではなく、中間に苦みのアク
セントを加えた「甘味→苦味→甘味」の流れ
である。この方が、確かに二度目の甘味もお
いしく頂けるというものである。

構造的な特徴について、もう少し指摘した

(参考5) 両章段における清少納言の感情要素

	興味・好感	不快感
二 百 十	・ 田植えをする人々の様子 ・ 具体的な田植えの方法	・ ホトトギスが悪く歌われたこと (ホトトギスひどく鳴くという人、 仲忠の生立ちをけなす人、ホトトギス が鶯に劣るという人)
二 百 十 一	・ 稲刈りをする人々の様子 ・ 具体的な稲刈りの方法 ・ 仮小屋の様子	

(参考6) 両章段の構造の横断的単純化



い。それは、男女のフォーカスの当て方である。第二百十段では「苗を植える女たち」にフォーカスし、第二百十一段では「稲刈りをする男たち」にフォーカスしている。しかし、実際には、時期に迫られる農繁期に、田植え全般を女たちだけで行い、稲刈り全般を男たちだけで行うとは到底考えられない。老若男女、子ども総出で役割を担うのが自然であり、そこには書かれざる人々の働きもあったはずである(参考7)。

清少納言は、田植えの主役に女たち、稲刈りの主役に男たちをフォーカスすることで、両章段を田植えと稲刈りの対比のみならず、男女の対比で一層のメリハリを図ったのではないだろうか。また、人の音声という点では、第二百十段には「歌唱」があり、第二百十一段には「人々のざわめき」がある。

さて、この「女、人、男」という表現に関連して、一つの疑問が起こる。日頃から、貴族の官位や身分の上下に敏感なはずの清少納言が「賤しき者」とか「下衆」という見下した表現を全く使っていないのである。彼女の

(参考7) 清少納言のフォーカス

	清少納言のフォーカス	書かれざること
二百十	・ 苗を植える女たち ・ 歌唱	・ その他の人々の働き
二百十一	・ 稲を刈る男たち ・ 人々のざわめき	・ その他の人々の働き

父清原元輔らとともに梨壺の五人と称された源順の『倭名類聚鈔』巻二の人倫部の人間分類(参考8)によれば、田植えや稲刈りは、さしずめ微賤類の仕業となるだろう。

ところが、清少納言は、田植えや稲刈りをする人々を少なくとも蔑むような眼差しで書いていない。それどころか、稲刈りを「自分でやってみたい」と言い、素朴で簡素であろう仮小屋にも「賤しき庵」とは言わず、肯定的なニュアンスで書いている。

これは、清少納言の身分を度外視した意外な側面である。

(5) ホトトギスの章段(田植えと歌 その二)

今度は、細部に注目してみたい。

① 伏線を存分に生かした書き出しと、伏線を裏切る書き出し

第二百十段の書き出し、「賀茂へ詣る道に」の「道」は、清少納言にとって高揚感をともなう特別な道であり、また、読者である中宮定子の興味を誘う「道」であったはずである。

この道は、第三十九段「鳥は」、第九十五段

(参考8) 『倭名類聚鈔』巻二、人倫部

	名詞のみ(説明略)
男女類	人、男、壮士、士、鰥夫、半月、婦人、娘、小女、姫、寡、孕婦、乳母
老幼類	翁、老公、古老、耆宿、嫗、刀自、專、髻髪、総角、童、振子、赤子、嬰兒
工商類	鑿、相工、工匠、鍛冶、陶者、客作兒、市郭兒、商人、裨販
漁獵類	漁子、漁父、白水郎、潜女、獵師、列卒、屠兒
微賤類	邊鄙、田舎人、人民、閭人、圉人、隴人、舟子、櫂師、渉人、奴僕、婢
乞盜類	巫覡、遊女、乞兒、愉兒、群盜、海賊、囚人

「五月の御精進のほど」、第二百六段「見物は」で、清少納言が賛辞を繰り返した賀茂祭り(葵祭り)の行列が華々しく行き来する道であり、彼女が絶賛するホトトギスが鳴く道であり、彼女と同僚の女房たちが卯の花の垣根のような牛車を走らせ、脱穀等を見せてくれた高階明順の別邸のある道でもある。特に、明順は中宮定子の身内である。

一方、第二百十一段の書き出しの「八月のつごもり、太秦に詣つとて見れば」は、偶然の目撃であり、「賀茂へ詣る道」とは方向が違う。伏線の流れからすれば、お馴染みの「道」で稲刈りに遭遇する方が自然とも思える。

稲刈りとの遭遇現場が、「賀茂に詣る道」ではなく太秦方面なのは、単に偶然とみればそれまでだが、敢えてお馴染みの「道」の裏をかいいたものではないだろうか。というのも、平安京からみれば下賀茂神社、上賀茂神社は北、太秦は西である。同じ頃、何処も収穫の時期を迎えていただろう。平安京の外側に広がる稲作空間を言外に表すには、「別の道で偶然に」の方がずっと効果的である。

② 田植えの歌について

清少納言がホトトギスの歌をすったもんだの挙句に棚上げしてきた結果、この歌は、一層新鮮で強烈な印象を帯びている。

まず、現代語訳の内容をあらためて眺めてみたい。(参考9)は、永井和子の訳を含めた四人の国文学者と一人の史学者(五味文彦)の現代語訳である。本文の微妙な差は底本の違いによるもので、ここでは立ち入らない。

五例の現代語訳に共通する要素は、次の二点であろう。なお、島内と五味は、歌の主を田植えをする女たちとし、他の三人は歌の主について特に触れていない。

・ 八つ当たり気味な感情を歌う歌詞

・ その原因と結果の因果関係

(ホトトギスが鳴く→田植え→我が苦労)

仮に、この歌の八つ当たり気味な感情を文字通り「怒りの感情」と解釈すると、ある素朴な疑問が生じる。そもそも、「やい、きさま、お前」という言葉は、たとえば、薪を割るとか、何かを壊すといった力任せの行為を連想させこそすれ、小さな苗を規則的に指先で植

(参考9) 田植えの歌の現代語訳

訳者・出典	本文	現代語訳
永井和子『枕草子』（新編日本古典文学全集）小学館	郭公、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、われは田植うれ	郭公、きさま、きゃつよ。きさまが鳴くから、おれは田植えをする
渡辺実『枕草子』（新日本古典文学大系）岩波書店	ほととぎす、をれ、かやつよ、をれなきてこそ、我は田植ふれ	時鳥よ、やい、あいつめ、きさまが鳴くおかげで、おいらは田植えさ
五味文彦『『枕草子』の歴史学』朝日新聞出版	ほととぎす、おれ、かやつよ、おれなきてこそ、我は田植うれ	ほととぎすよ、お前、きゃつよ、そなたが鳴くから、我は田植えをしなければならぬ
島内裕子『枕草子下』筑摩書房	時鳥よ。己よ。彼奴よ。己、鳴きてぞ、我は、田に立つ	時鳥よ。おい、お前さんのことだよ。お前が鳴くから、あたしが田んぼに、下り立って、こんなことをしなくちゃならないのさ。お前のせいなんだよ
田中重太郎『枕草子全注釈』角川書店	ほととぎすよ。おれよ。かやつよ。おれ鳴きてぞ、われは田にたつ	ほととぎすよ。お前よ。あいつよ。お前が鳴いて（その季節に）おれは（田植えのために）田におり立つ（よ）

える繊細な作業を反復継続するには、およそ馴染まないのではないかという疑問である。怒っていても能率も上がらないし根気も続かないだろう。「怒りの感情」は、一般論としても経験論的にも、あらゆる作業進行の妨げであり促進材料にはならない。

農繁期は、同時に地域一円に訪れる。数日のうちに田植えを済まさなければならない。経営主なら、繁忙期に相応の報酬で人手を確保し、田植えの成功のカギを握る大事な人手が気持ちよく精を出してくれることに心を砕くのが自然ではないだろうか。

したがって、この歌の感情を文字通り「怒りの感情」と解することも、田植えをする女たちを歌の主と解することにも、懐疑的にならざるを得ない。

では、いかに解釈すればよいだろうか。筆者は、次のような解釈も可能と考える。

- ・歌の主は、書かれざる人々の一人。『壬生の花田植え』におけるサンバイのように親歌を歌い田植えの進行指揮にあたる男。
- ・八つ当たり気味な感情を歌う歌詞は、田植えをする女たちを癒すための詩的なフィクション。

（歌の主を一人の男と考える理由）

- ・（参考9）のいずれにおいても、歌の後には、「とうたふを聞くも」とあるだけで、清少納言は歌の主を明示していない。つまり、歌の主が誰であるかは解釈の問題である。
- ・確かに、歌中の主語からすれば、「我は田植うれ」とあるので、歌中の主人公は田植えをする女であることは間違いない。しかし、歌の主と歌中の主人公は必ずしも同一とは限らない。男が女心を歌う例は、ありふれている。
- ・この歌詞は、集団歌唱に馴染まない。声を揃えて「おれ、かやつよ、おれ鳴きてこそ」

と歌うのは非常に難しい。声を合わせようとすれば、おそろしく遅いピッチになるだろう。単独歌唱と考えるのが自然である。

- ・清少納言と同時代を生きた赤染衛門の『榮花物語』に描写されている田植えには、田植えをする女たちの他に、男たちが太鼓を叩きながら歌を歌い、また指揮者らしき老人のことも書かれている。

（歌詞を癒しのフィクションと考える理由）

- ・そもそも、彼女たちは生活のために田植えをするのであって、ホトトギスが鳴くことと、彼女たちの田植えには直接の因果関係はない。したがって、この歌詞の因果関係はフィクションである。ただし、現実の重要部分を含む詩的なフィクションである。

（歌詞）ホトトギスが鳴く→田植え→我が苦労

（現実）生活上の要請→田植え→我が苦労

つまり、歌詞と現実に通ずる「田植え→我が苦労」が共感の基礎となる重要部分であり、「生活上の要請」を「ホトトギスが鳴く」と言い換えることで、この歌は現実を詩的なフィクションに仕立て換えている。

- ・一般論として、第三者が当事者の気持ちに寄り添って代弁することが、当事者の癒しにつながることは、よくあることである。田植えを指揮する男が、田植えをする女たちの気持ちに寄り添い、詩的なフィクションに仕立てた歌を一杯歌うことが、彼女たちを癒したとしても不思議はない。

清少納言は、ホトトギスに負の要素を加えられることを嫌う。田植えの歌に不快感を示したのは、大好きなホトトギスにありもしない原因責任が負わされたからであろう。しかし、清少納言は、歌の主を微塵も責めてはいないのである。

（6）田植え等を題材にした背景

清少納言は、『枕草子』の題材に、なぜ田植

えや田植え歌、稲刈りを取り上げたのだろうか。偶然あるいは興味本位に書いただけという捉え方もあるかもしれない。

しかし、果たして、そう言い切れるのだろうか。筆者は次の二つの理由から、清少納言には、農業を尊重する意識があったと考えたい。

- ・中宮定子の伯父である高階明順が、脱穀風景等を見せた際に言った「こういう所に来たら、こうした事を見るべき」との訓示的な言葉がある。その延長線上に想定されるのは、田植えや稲刈りであり、それは、脱穀以上に「見ておくべき事」に他ならない。
- ・日頃、身分の上下に敏感な清少納言が、田植えや稲刈りをする人々を見下すことなく、同じ地上の人間として「女、人、男」と呼んでいる。そのスタンスは、稲刈りを「自分でやってみたい」という言葉によく表れている。また、一見唐突に思える仲忠の生立ちをめぐる反発心とも整合性がとれる。

また、傍証として、清少納言の農業を尊重する意識を想像させる材料を二つあげてみたい。

- ・『史記』の「農は天下の本なり」

清少納言は、第百九十八段「文は」（漢文の書は）で、『史記』と特にその「五帝本紀」をあげている。

秦よりも古い時代の伝説上の名君を記した「五帝本紀」では、聖帝と呼ばれた堯、その堯に見いだされ帝位を継承した舜が有名である。前漢時代の孝文本紀では、堯・舜を手本とする孝文帝は、「農は天下の本なり」と農を筆頭政策に掲げて、その先頭に立った。

次の歌は、『枕草子』第百三十段「頭弁の、職にまゐりたまひて」の中で、清少納言が邪まな誘いを断る際に詠んだ歌である。『史記』の孟嘗君列伝の故事を踏まえている。のちに『百人一首』六十二番の歌としても知られる。

夜をこめて鳥のそら音にはかるとも 世に逢坂の関はゆるさじ

（夜のまだ明けないうちに鶏の声色で函谷関の関守をだますとしても、けっしてこの男女相逢うという逢坂の関は、だまされて許すようなことはしないつもりです）

『史記』は、「本紀」「書」「表」「世家」「列伝」で構成される。「本紀」と「世家」は王朝史であり、その補完をするのが「表」。「書」は文化史であり、シリーズ後半の「列伝」は英雄史である。

清少納言が「列伝」を読んでいたとすれば、歴史の幹である帝史「本紀」にある「農は天下の本なり」を知っていても不思議はない。

- ・『後撰和歌集』の天智天皇御製歌

『枕草子』第二百十一段「八月のつごもり、太秦に詣づとて」の中で、清少納言は田の脇にある仮小屋の様子にも注目している。

清少納言の父清原元輔が撰者の一員を務めた『後撰和歌集』には、天智天皇御製とされる稲作にちなんだ歌がある。帝が稲を守るために仮小屋で番をするという歌である。この歌を知らない清少納言ではなかったろう。のちに『百人一首』の一番を飾る歌である。

秋の田のかりほのいはの苦を荒み わが衣手は露に濡れつつ

（秋の田を守るための仮小屋の、苦で茸いた屋根の目が荒いので、私の袖は露にしとどに濡れていることであるよ）

『後撰和歌集』（新日本古典文学大系）より

藤原定子が十一歳の一条帝に入内したのは十四歳のときだという。幼い頃から行動に制約の多かった中宮定子に広い世界を知らせることも目的の一つだったのかもしれない。

5. 歌う人々

『枕草子』の田植えと歌にちなんで、古今東西の田植えと歌を集めてみた。

(1) 『栄花物語』の田植えと歌

清少納言と同時代を生きた赤染衛門の『栄花物語』第十九巻「御裳ぎ」にも、田植えと歌が描かれている。賀茂の祭りが済んだ五月。故藤原道隆の弟道長は、一条帝の二人目の中宮（后）から皇太后になっていた娘の彰子に田植えを見物させるため、平安京の東端にある寺院に観覧席を造らせた。

いうまでもなく、一条帝の一人目の中宮は、道隆の娘であり清少納言が仕えた定子である。赤染衛門は、和泉式部や紫式部とともに中宮彰子に仕えた女房である。

この時すでに、中宮定子は三人目の親王の出産と引き換えに二十四歳の若さで崩御し、それから約二十年の歳月が経過していた。

赤染衛門は、道長が、「いつもの姿で着飾ることなく、ありのままの姿で（催せ）」と指示したことも書いている。

集まった五、六十人の娘たちの様子、太鼓を叩きながら歌う十人ほどの男たちの様子、指揮者らしき翁^{おきな}の様子など、その内容は、焦点を絞らずに書かれているため、清少納言が書いた田植えよりも詳細である。ただし、赤染衛門は、田植えをする人々に対して清少納言が用いなかった「賤しい女」「賤しい男」という言葉を用いている。

(2) 『田植草紙』の田植え歌

『田植草紙』^{たうえぞうし}は、近世の「田植え歌＝囃子田歌謡」^{はやしだ}を記した写本である。花田植えや囃子田の本場、広島県北広島で大正時代に発見された。ただし、その歌の源流は、同書の解説によれば、安土桃山時代まで遡るという。

収録された田植え歌は、時間帯により「朝歌」「昼歌」「晩歌」があり、それぞれに、壺

番、二番、三番、四番がある。つまり、一日の歌は合計十二番ということになる。

次の歌詞は、ホトトギスが登場する昼歌三番の冒頭部分である。この後に別内容・同分量の歌詞が六連あって、昼歌三番は完結する。

一. ほととぎす 小^こ管^{くだ}の笠^{かさ}をかたぶけて
聞^きけどもあわぬ ほととぎす
さ月^{つき}管^{くだ}笠^{かさ} おもふが方^{かた}へかたむく
管^{くだ}は十^と編^ひすげ 笠^{かさ}の緒^おに 三^{さん}嶋^{じま}の八^やつ打^{うち}
大^お山^{さん}笠^{かさ}に綾^{あや}の緒^お

具体的な歌唱法は、まず、音頭取りであるサンバイが親歌を歌い、早乙女たちが子歌を返す掛け合いが基本となる。このスタイルは、『壬生^{みづう}の花田^{はなう}植え』と同様である。

実際に、『壬生^{みづう}の花田^{はなう}植え』を見学して感心したのは、田植えの指揮者であるサンバイは、早乙女たちの返す歌声から呼吸の乱れや疲労度を測り、適宜休憩を入れたことである。恋の歌や和みの歌を交えて早乙女たちを癒しながら、早乙女たちの元気度や疲労度のバロメーターとしても彼女たちの歌声を聞いていたのである。文字だけでは測れない田植え歌の神髄を見せてもらったような気がした。

(3) 唱歌「夏は来ぬ」の田植え

文部省唱歌だった「夏は来ぬ」^{なつは来ぬ}は、旧暦五月の風景を夏の到来として詠んだ歌である。作詞は、幕末に歌人の家に生まれ、『万葉集』研究の第一人者だった国文学者の佐佐木信綱である。この歌は、平成十九年に「日本の歌百選」に選ばれている。

その歌詞をよくよく読むと、『枕草子』に見られた五月を象徴する約千年前の言葉が、実に沢山盛り込まれていることに気づかされる。

一. 卯の花の、匂う垣根に
時^{とき}鳥^{とり}、早も来鳴きて、
忍^{しの}音^{びね}もらす、夏は来ぬ

- 二. 五月雨の、そそぐ山田に
早乙女が、裳裾ぬらして
玉苗植うる、夏は来ぬ
- 三. 橘の、薫る軒端の
窓近く、螢飛びかい
怠り諫むる、夏は来ぬ
- 四. 棟 ちる、川辺の宿の
門遠く、水鶏声して
夕月すずしき、夏は来ぬ
- 五. 五月やみ、螢飛びかい
水鶏鳴き、卯の花咲きて
早苗植えわたす、夏は来ぬ

(4) 映画の田植えと歌

田植えと歌が作品の重要要素として描かれた映画を二本紹介したい。日本映画『七人の侍』とイタリア映画『にがい米』である。

○『七人の侍』(1954年日本)

黒澤明監督の『七人の侍』が、後のハリウッド映画や日本のテレビドラマに多大な影響を与えたことやそのストーリー(収穫直後の麦を狙って襲撃してくる四十騎の野武士集団を、僅か七人の侍と村人が協力し殲滅する)は周知のとおりである。

映画のラストシーンでは、村の娘たちがこざっぱりした着物に褌^{たすき}を掛け、菅笠をかぶり、並んで歌いながら笑顔で苗を植え、村の男たちは力強く太鼓を打ちながら明るく歌う。

○『にがい米』(1949年イタリア)

『にがい米』の舞台は、欧州最大の水田米作地帯の北イタリアである。映画冒頭のナレーションは、次のようにいう。「北イタリアの米作りは、中国やインドから伝わったもので500年の歴史がある。この米作りを支えてきたのは、多くの女性たちの手である」

田植えの時期に各地から汽車やトラックの荷台に乗ってやってくる出稼ぎの女性たちは、モンディーナと呼ばれた。彼女たちは、農場主が用意した寄宿舍で四十日間を過

し、田植えと雑草取りをする。報酬は現物の米である。映画はその四十日間の物語である。

田植えのシーンでは、支給される麦わら帽子を被り、民謡の替え歌を歌いながら、列をなして苗を植えながら後退する。雑草取りの際にも歌を歌っている。

イタリアでは、高度成長期(日本と同時期)に手植えから直接水田に種を播く直播方式に転換し、田植えは現在行われていない。モンディーナたちが過ごした寄宿舍は、観光資源として当時のまま保存されているという。

ちなみに、伊和辞書を引くとRisoには、米の他に、笑い、笑声という意味も載っている。

(5) 田植えと女性の指

古今東西、なぜ苗を植えるのは女性の仕事だったのだろうか。民俗学者の柳田国男は、昭和九年の論考「田植のはなし」の中で、女性の指に注目し、次のように述べている。

田植風景には早乙女がつきものである。(略)東京附近などでは他の地方に比べて、耕作婦人労働を見ることがすくなくなくなっている。ところが、その中にあって今でも田植だけは絶対に女の手を必要としている。どうしても田植には女を省くことができないのである。

単調な動作を頻繁無数にくり返すのだが、手の出し方ひっこめ方にもコツがあって、やり方によっては関節を痛めてしまう。さし手というのはそれである。さし手にならずにしかも数多く植えるというのには、どうも女が適しているようである。(略)苗の挿し加減もなかなかむづかしく、総じてこの種のことは女ならではの事なのだろう。実際男にやらせてみるとよくわかる。

『柳田国男全集18』より

奇しくも柳田は、映画『にがい米』のナレーションと同じことを指摘している。確かに、

か弱い早苗を早く根付させるには、女性の細い指で挿す方が理に適っている。

さて、日本の田植えは、高度成長期以降、手植えから機械植えに転換した。日本の発明品である田植機には、前進することを除いて、手植え時代の技術が応用されているようだ。田植機の歴史は、公益社団法人農林水産・食品産業技術振興会のホームページ掲載の「田植機誕生前夜、独創の芽を育てた農民発明家たち」などで知ることができる。

柳田も注目した女性の指に関連して、田植機の重要部品を見てみよう。苗を挟んで水田に挿し込む通称植付爪である。(参考10) の場合は、品名はフィンガー13Gとなっている。二股部分の長さは、およそ人の指の第二関節から先の長さと同じである。そして細い。

日本の稲作について、映画『にがみ』のナレーション風に言ってみようと思う。

「日本の米作りを支えてきたのは、多くの女性たちの指である。その伝統は現在も田植機の金属製の指となって活かされている。」

(6) 田植えにつきものだった歌

かつて、田植えに歌がつきものだったのは、なぜだろうか。単調で反復継続的、まさに作業そのものは機械的だったからこそ、人間味の溢れる歌の力がどうしても必要だったのではないだろうか。歌うことで連続動作にリズムを与え、互いを癒し励ましたその知恵は、何としたたかで健やかなことか。

(参考10) 田植機の植付爪



6. まとめ

中世の田植えの伝統を今に伝える『壬生の花田植え』と約千年前の『枕草子』の田植えの様子には、共通の基盤があるはずである。

この仮説を確かめるために縷々述べてきたが、少なくとも、一見別物として存在する伝統行事と古典文学も、接点を見出しさえすれば、価値を補い合う可能性を持っていることは確かだろう。

『枕草子』の田植えには、苗を植える女性たちがいて歌があった。散文形式の文章としては、伝統的田植えの核心を突いた日本最古級の記録ではないだろうか。

『壬生の花田植え』が広島県北広島町の域を越え、日本と日本農業にとって大切な財産であるように、『枕草子』の田植えと歌も古典文学の域を越え、日本と日本農業にとって大切な財産であることを指摘しておきたい。

(参考資料)

- ・山本淳子『枕草子のたくらみ』(朝日新聞出版・2017年)
- ・小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』(新編日本古典文学全集・小学館・1994年)
- ・松尾聰・永井和子『枕草子』(新編日本古典文学全集・小学館・1997年)
- ・中野幸一『うつほ物語①』(新編日本古典文学全集・小学館・1999年)
- ・佐竹昭広ほか『万葉集(二)』(岩波書店・2013年)
- ・源順『倭名類聚鈔』(国立国会図書館デジタルコレクション)
- ・渡辺実『枕草子』(新日本古典文学大系・岩波書店・1991年)
- ・五味文彦『『枕草子』の歴史学』(朝日新聞出版・2014年)
- ・島内裕子『枕草子下』(筑摩書房・2017年)
- ・田中重太郎『枕冊子全注釈四』(角川書店・1983年)
- ・吉田賢抗『史記二(本紀二)』(新釈漢文大系・明治書院・1973年)
- ・片桐洋一『後撰和歌集』(新日本古典文学大系・岩波書店・1990年)
- ・山中裕ほか『栄花物語②』(新編日本古典文学全集・小学館・1997年)
- ・友久武文ほか『田植草紙、山家鳥虫歌、鄙廼一曲、琉歌百控』(新日本古典文学大系・岩波書店・1997年)
- ・柳田国男『田植のはなし』『柳田国男全集18』(筑摩書房・1990年)